

古代大和國家の發展を陰で支えた実力者一族の頭領

吉田山の「白樺」という学生相手の飲み屋に、私達はトグロを巻いていた。ママと高校二年生の娘が醸しだす家庭的な雰囲気は魅きつけられる何かがあったのかもしれない。眼鏡の奥底に人なつつこい笑みをたたえて、広隆寺の弥勒菩薩の素晴らしさを情熱的に語っていた秦野という学生は私と同じ法学部五組の二回生だった。第二外国語にドイツ語を選択する学生が多い中で、フランス語を選択した数少ない変わり種の一人であった。秦野を教室で見かけることは少なく、秦野に会おうと思えば、夜「白樺」を覗いてみればよかつた。彼は、歴史書、美術書を片手に、京都・奈良の神社仏閣を訪ね歩くのを日課としており、夜になると「白樺」へ現れ、同好の学生を相手に彼独特の見方で歴史上の事実を解釈し、皆に披露するのであつた。

夏休みになつて、学生達がそれぞれ帰郷し、「白樺」が閑散となつていたある日の新聞に広隆寺の弥勒菩薩に抱きついて、あの見事な流れるような線の右手の指を折つてしまつた学生のごが社会面の記事として報道された。犯人の学生の名前は伏せられていたが、その記事を読んだとき私は何故か秦野という学生が犯人に違いないと直観した。

「推古天皇が美人であつたから、聖徳太子は半跏思惟像を秦河勝に与えたのであり、崇峻天皇が殺されたのもそのためだ。聖徳太子が天皇になれなかつたのもその所為なのだ。美しいことは罪悪だ」と熱ぼく語っていた秦野の言葉を思い出したからである。眼鏡の奥底に光るあの人なつつこい眼差しは彼流に言えば犯罪だからである。

その夜、久しぶりに「白樺」へ行つてみたが秦野は帰郷したらしいということ、彼の姿を見かけることは出来なかつた。この事件があつてから私は教室でも「白樺」でも秦野の姿をみかけることは出来なかつた。

私が秦河勝についてその生涯を辿つてみたいと思つたのは、学校卒業後さる大手の製造会社に就職して二十年程経つたある日、京都の南禅寺境内にある某僧坊で開かれた同窓会に出席し秦野に会つたからである。この僧坊は権限の乱用で社長職を解任され世間を騒がせた有名百貨店の社長とその愛人の女実業家が逢瀬の場所として使つていたその百貨店の元接待寮であつた。

そして二十一年いや二十二年振りに再会した秦野はやはり眼鏡の奥に人なつつこい笑みを湛えていた。聞けば暴力団のみをお客にとる有名な弁護士になつていてということであつた。

美しいことは罪悪だと言つた彼。人なつつこい眼差しは犯罪であると思つた私。この二人の二二年振りの邂逅が何故か私を千四五百年前の世界へ誘うのである。

「この子には河勝と名付けることにしよう」と父の秦國勝（はたのくにかつ）は皺くちゃだだらけの嬰兒の顔を覗きこみながら、産褥にある妻の赤子郎女（あかこのいらつめ）に向かつて言つた。

「河に勝つですか。強そうでいい名前ですこと」と赤子郎女は嬰兒の頬に頬ずりをしながら応えた。

「そうだ。桂川に先ず勝つことだ。そして世の流れという大きな河に勝つことが秦一族の繁栄に繋がることになるのだ」と國勝は最近氾濫した桂川を部民を指揮しながらやつと治めた十日程前のことを思い出しながら言つた。

「先祖ゆかりの地新羅が栄えるのはよいことじゃ。この子もきつと幸せを掴むじやう」

秦國勝の先祖は新羅から渡来してこの葛野（かどの）の地に定着した帰化人であったが、昨日出仕したときに、大臣の蘇我稻目から最近、任那の日本府が新羅にうち滅ぼされたと聞かされていたので、新羅の国から渡来した遠い先祖のことを偲びながら言った。

河勝が生まれたのは562年欽明天皇の御代のことであった。

この時代は、蘇我稻目が娘の堅塩媛（かたしひめ）と小姉君（こあねぎみ）の姉妹を欽明天皇の太后・后として宮中に送り込み、外戚としての地位を確立し、権勢を誇っていた時期である。

河勝は幼少の頃から聡明な子供であり、色々なことに興味をしめした。

「まあこの子はなんて勿体ない食べ方をするんでしょう。そんなに沢山飯粒を残してからに。河勝や、御飯は一粒でも残したら罰があたりますぞ。お米が食べられるようになるまでには多くの人々が八十八回も汗を流しているのですからね」と母親の赤子郎女は木の椀の端に残っている飯粒を指さしながら河勝を叱った。

「はい。ごめんなさい」と素直に謝ってから河勝は椀の端にへばりついている飯粒を可愛らしい手でつまんで口へ運びながら聞いた。

「八十八回の汗とはどんな汗ですか」

「お米を作るには、先ず田圃を耕して、水を引き、苗代を作ります。苗代を作るためには草をとり、畝を作つて肥やしをやり、また耕して畝を作りその上に種籾を蒔きます。種籾を蒔いてからも種が鳥や雀に食べられないように、籾殻を焼いてその上にかぶせますのじゃ。芽がでてから草をとつたり、肥料をやつたりして苗を育てるので。苗が育つとこれを抜いて、田植えをします。田植えをするためには、その前に別の田圃を耕して水を引き、準備をしておかなければなりません。田植えが終わってからも、田の草取りをしたり、水車を踏んで水を田圃へやらなければなりません。たてたり鳴子をつけたりしなければなりません。十分穂がみのつたら今度は稲刈りです。刈り取った稲は乾燥させて、脱穀しさらに乾燥させてから今度は籾擦りをして籾殻とお米を分離しなければなりません。こうしてできた玄米を臼で挽き、糠をとってはじめにお米ができるのですよ。このようにしてお米ができるまでには、八十八回も手間をかけ汗を流しているのです。このことを忘れないように、御先祖様は米という字を作られたのです。」

赤子郎女は秦一族が米作りに如何に血と汗を流してきたかを、一族の未来の統率者に子供のうちから教えこんでおかなければならないという使命感に燃えていた。

「河勝や、お米は今では田圃で作りますが昔は山の中の畠で作られていたのですよ。昔々、お米が此の国へ渡つてきた頃は山を焼いて、その跡へお米の種を蒔き、稔ると稲穂を摘み取りその跡へは桑の木を植えたのです。桑の葉はお蚕さんの餌になるのです。その頃はお米の収穫量はとも少なかったのです。稗とか黍や粟のほうが作りやすく手間も掛からなかったのですよ。山を焼いて種を蒔き、採り入れが終わるとその跡へ桑の木を植えて次の土地へ移つていくのです。だから今のようになつた場所に留まつてお米を栽培するというようなことは無かつたのです。」

母の赤子郎女は秦國勝の許へ嫁いできたときに一族の長老から教えこまれた米作りの歴史を最愛の息子に伝えるのに懸命であった。

「それでは何時頃から、今のよう田圃でお米を作るようになったのですか」

「この国に鉄製の鍬や鋤が半島から渡ってきて、畠を耕すことが楽になったころからです。今から二百年程昔のことです。その頃には山の中の畠で水を溜めやすくまた水の抜きやすい所を選んで御先祖は稲を栽培するようになつたのです。このような畠を棚田といふのです。水稲のほうは陸稲よりも収穫量が多いので水田でお米を作るようになったのです。そして、農耕技術が進んでくると、次第に人々は平地へ下りてきて大きな水田でお米を作るようになったのです。作物を作る場所を『畠』とか『畑』とか書きますが読み方は八タケと八タケです。八タケは白い田つまり火を使わないからシロイ田なのです。定まつた場所で作物を作るところつまり定畑を表し、八タケは火の田つまり焼き畑を表すのです」

母は指先に水をつけて飯台に『畠』と『畑』という二文字を書きながら説明する。

「それでは水田で稲を栽培するようになったのは最近のことなのですね」

「そうですよ。秦氏の『秦』を今では八タと読んでいますが昔はシンと読んでいたのですよ。同じように秦人はシンヒトと読んでいたのです」

「何故、シンを八タと読むようになったのですか」

「それは秦氏が管理している一番大切なもの、つまり作物を作る八タと織物を織る八タを管理している人という意味でいつの頃からか世間では秦氏のことを八タ氏と呼ぶようになったのです。このように秦一族にとっては農耕と機織はそれを抜きにしてはその存在価値がなくなる程大切な仕事なのです。更に土木技術にも秀でていたからこそ川の流れを変え田に水を引くことが出来、飛躍的にお米の収穫量を増やすことが出来たのです。この葛野の桂川に大堰を築き氾濫を無くしお米が採れるようにされたのも御先祖様の努力の賜物なのです」

「御先祖様って偉かつたのですね。秦氏の御先祖様はどんなかただったのですか」と河勝の好奇心は飛翔してゆく。

「遡れば秦の始皇帝にまで行き着きますが、弓月の君（ゆづきのきみ）という人が秦氏の始祖とされているのです」

「もつと聞かせて」と河勝はせがむ。

「今日はここまで。もう遅いからお休みなさい。弓月の君のことは深草の長老様にお願ひして教えていただきなさい。私よりも詳しいことをご存じだから」

母の赤子郎女は我が子河勝の知識欲にたじたじとなりながら、やつと寝かせ付けた。日本列島に米が渡来したのは2,200年程前だとみられている。秦河勝が生まれた頃から数えれば約770年程昔のことである。米は倭人が日本列島にもたらしたものであることが考古学・歴史学・民俗学・比較人類学等の研究の成果としてほぼ証明されている。

そもそも倭人とはどのような人種であり、日本の経済及び文化の基礎となつた米と倭人とはどういう関わりを持ったのかということを通つてみれば、秦河勝の先祖である秦人とその子孫である秦一族が日本の農耕技術・養蚕技術・土木技術・手工業技術に秀でたものを持つており、祭祀に重きをおく氏族であつて、古代大和國家の繁栄に多大の貢献をした氏族であることが理解できるであろう。

米の原種は大きく分ければ、四種類位に分けられるが、アジアでつくられるのはこのうちの長粒米（インディカ）と短粒米（ジャポニカ）との二種類である。同じ米であつてもこの長粒米と短粒米とは、人間と猿くらいの違いがある。即ち長粒米と短粒米とをわけあわせても、穂はできるけれども実がでない。つまり染色体の数が基本的に違つているからである。この長粒米と短粒米の原種の分布を調べてみると、氾濫原では長粒米しかなく、河岸段丘の上で作られていた米は殆どが短粒米であつた。長粒米の発祥の地はガンジス河流域のような氾濫原であり、短粒米の発祥の地はヒマラヤ山系の谷々のような棚田である。棚田とは水を溜めれば湿田となり水を落とせば